

文化を通して見る 21 世紀中国

森平 崇文

はじめに

2009 年度「中国語圏の文化」の担当者となり、前期が池袋、後期が新座の各キャンパスにおいて開講した。本稿執筆段階で後期の新座における授業も終了しており、この場を借りて1年間の授業を総括してみたい。

授業のねらい

数年前までの日中関係を表現したものに「政冷経熱」という言葉がある。政治的交流が不活発なのに対し、経済的交流の方は活発であるという意だが、日本のメディアで報じられる中国関連のニュースとしてはその活発さの度合いに関係なく、同時代の政治と経済に関するものが圧倒的多数を占めている。

一方、同時代の文化に関してはよほど衝撃的なものでない限り、メディアを通じて日本に紹介されることは少ない。そのため日本では中国の同時代の文化に対し、共産党による締め付け・統制が強く、プロパガンダ的なものに溢れているといった、ステレオタイプ化したイメージを抱きがちである。

ところが実際は、中国の文化環境は 21 世紀前後からそれまでと比較にならないほどの速度と規模で、中国全体の変化を牽引するほどの変貌を遂げてきているのである。このような歴史的変動が起きている現代中国の文化状況にほとんど注目することなく、相変わらずの論調が繰り返される日本の現状を憂慮すべきものと考えられる。

そこで「中国語圏の文化」担当のお話を頂いた際に授業のテーマとして浮かんだのが、21 世紀以降の中国の文化領域において発生した様々な現象、話題の作品や人物を紹介することを通じ、履修者に中国文化の現状を知ってもらうということであった。文化領域の中でもマス・メディアを中心としたのは、その変化の速度と規模、及び社会への影響力が最も大きく、また履修者の関心も比較的強いと判断したからである。



授業内容

各回の授業で取り上げたのは、以下の通りである。硬軟のテーマをバランスよくという方針を立てたはずが、結果として軟の方がやや多くなってしまった。

1. ガイダンス：プロパガンダとマス・メディア
2. テレビ（報道）：CCTV「新聞調査」が報じたもの
3. テレビ（ドラマ）：周梅森が描く地方政府

4. テレビ（時代劇）：武俠パロディー「武林外伝」
5. テレビ（バラエティー）：スター誕生「超級女声」
6. ラジオ：万峰の深夜人生相談
7. 出版：閻連科と章詒和に対する発禁処分
8. 教育：陳丹青、清華大学辞任の波紋
9. お笑い（コント）：趙本山と小品の20年
10. お笑い（漫才）：郭徳鋼ブームとその背景
11. 映画（大陸）：華誼兄弟会社の隆盛
12. 映画（香港）：トニー・レオンとアンディ・ラウ

テーマの選択に関しては、現在の日本で中国に対して抱きがちなイメージを修正するもの（テレビ（報道）、テレビ（ドラマ）、出版など）と、履修者とはほぼ同世代の中国人の間で支持されて社会現象となったもの（テレビ（時代劇）、テレビ（バラエティー）、お笑い（コント）など）の2点を基準とした。ただし、各テーマにおいて具体的にどの事件・人物・作品を取り上げるかは、担当者の中国滞在経験や嗜好によるところが大きく、その選択にややバランスが欠けている感も否めない。結果として2009年度は、アニメ・音楽・美術・文学・演劇・建築等、21世紀に入ってから注目すべき変化や作品が見られたジャンルを独立して取り上げることができなかった。

授業では特に教科書は指定せず、毎回A3用紙1枚程度のレジユメを作成して配布し、参考文献として現在の中国社会とメディアの状況を知るための新書2冊（渡辺浩平『変わる中国 変わるメディア』講談社現代新書2008年と、麻生晴一郎『反日、暴動、バブル新新聞・テレビが報じない中国』光文社新

書2009年）を紹介した。

第1回目のガイダンスでは主として、現代中国の文化事情を理解する上で前提となる、1978年に始まる改革・開放政策から、1989年の天安門事件、2001年のWTO加盟、2008年の北京オリンピックまでの歴史的流れ、中国共産党の文化政策の特徴や、「股民」（株式投資家）「網民」（ネット・ユーザー）「80後」（1980年代生まれ）「90後」（1990年代生まれ）等、21世紀中国のキーワードを取り上げて解説した。

教育上の工夫

授業に際して特に留意したのは以下の4点である。

まず、教材として映像資料を用いることである。マス・メディアを対象とするため、言葉による説明よりも、映像を履修者に直接紹介する方が理解により効果的な場合が多い。幸い、同時代を扱うため映像資料は比較的入手しやすい。今年度は「出版」を除く全ての回で、取り上げたテーマに関連する映像を紹介することができた。しかし紹介できたといっても時間的制約のため、何れもほんのさわり程度に止まり、時間に換算すれば毎回合計で10分にも満たなかった。それでも履修者からは「中国のテレビ番組やお笑いを初めて見ることができてよかった」といった反応が多く寄せられた。使用した映像の多くは日本未紹介のため、日本語の字幕はおろか中国語の字幕すら付いていないものもかなり含まれていたが、その場合は担当者が適宜通訳と解説を挟んだ。

次に、取り上げる事象・作品・人物に関して、できる限り詳細な情報を提供することである。事象であればその経緯、作品であればその内容、人物であればその経歴を、具体的且つ詳細に

紹介するよう心がけた。それは、担当者の解説というフィルターをなるべく通さず、履修者にダイレクトに情報を提供することによって、履修者自身にその解釈を委ねたいという意図による。このようなやり方は授業で対象とするのが、履修者にとって理解しやすい同時代の、しかもマス・メディアに関するものの場合、より効果的と判断したからである。

そして3番目に、文化を通して現在の中国全体を考察する視点の提示である。この授業で扱うのは主に文化であるが、それでも履修者にはこの授業を通じて現代中国、そして中国に暮らす人々に多くの関心を持ってもらいたい。今年度の授業では、例えば「ラジオ」では深夜放送と都市における出稼ぎ労働者の関係、「お笑い（漫才）」では2005年の漫才ブームと大都市における中産階級増加との関係、「映画（香港）」では1997年の香港返還以後の香港映画界・映画産業と大陸との関係などを取り上げて、マス・メディアで起こった現象・事象を、その背後にある中国社会全体の中から考察する視点を示すことができた。

最後に、現在の中国文化に履修者がアクセスするためのツールの紹介である。映像資料も含め授業で実際に紹介できるのは何れも一部分に過ぎず、履修者の個別的な関心に十分応えることはできない。そこで授業で紹介した情報や映像資料の日本における、或いは中国に行った際のアクセス方法等について簡単であるが紹介を行った。ただこれに関しては全授業でわずか1回、しかもネット検索・購入方法と、北京と上海の代表的書店やチケット・センター等を列挙するに止まり、もう少し数回の授業にて事例ごとに具体的なアクセス方法を紹介した方が履修者には有効であったと考えている。

学生の反応

履修者の構成は何れのキャンパスにおいても、現在中国語や中国に関連する科目を履修中であるもの、旅行や短期留学を含め中国に滞在した経験があるものが7割近くを占めた。だがその他に、中国語はおろか高校時代世界史を選択せず、中国に関する知識がほとんどないもの、更には中国からの留学生まで含まれており、開講時にはどのような履修者に基準を合わせて授業を行うべきか、幾分苦慮した。

実際の授業では、高校の世界史の教科書に掲載されているような事項の説明は特に行わず、日本語の字幕がない映像資料を用いても担当者が適宜簡単に解説する、ということにした。毎回授業の最後にリアクション・ペーパーを配布し、次の授業冒頭においてそこで出された質問の一部に答えるという方式を採用したが、「日本語の字幕があった方がより理解できてよい」という意見はあったものの、「全く理解不能であった」というコメントはほとんどなく、また中国人留学生からは紹介したものに対するより詳細な情報や異なる意見が寄せられるなど、履修者各人の中国語と中国に対する理解度の違いをさほど意識することなく授業を続けることができた。

更に履修者からは、授業で取り上げた内容が21世紀のある特定の時期に限定される場合、「それは今どうなっているのか」という質問が多く寄せられた。そのため授業を追うごとに、2009年現在における状況についても可能な限り紹介することを心がけるようになった。

その他、「中国に対する印象が変わった」「今の日本との共通点が多く見出された」「授業で紹介したものを全部見てみたい、続きが気になる」などのコメントが寄せられ、担当者の授業当初のね

らいが幾らかでも履修者に通じたように安堵している。授業に対する反応を通じて、現在の中国の文化事情、及び同世代の中国人の考え方や嗜好に関心を抱く日本の学生は決して少なくないということが確認でき、担当者自身大きな収穫を得たと感じている。また、担当者の伝えたことを正反対に理解している履修者がいることも毎回確認でき、リアクション・ペーパーの効用も実感できた。

2009年度の履修者は池袋キャンパスで約80人、新座キャンパスで約70人であった。学年では1、2年生が大半を占めた。何れも1限に開講したため遅刻者は目立ったものの、授業中の私語に関し注意したことはなく、担当者には申し分のない授業環境であった。またリアクション・ペーパーからも履修者の授業に対する熱意を十分感じ取ることができた。

おわりに

最後に2009年度の授業における反省

点を述べて筆を擱きたい。

まず、担当者のこの「中国語圏の文化」という科目に対する理解の不足である。開講前に設けられた担当者連絡会に本務校の事情で参加できず、本科目開設の理念等を十分把握できないまま開講を迎えてしまった。その結果、全カリに設置された他の中国関連の科目との差別化やバランス、また授業を通じて中国語履修者の学習意欲を更に向上させるといった点をほとんど考慮することなく授業を進めてきた。

次に、履修者の反応や意見を授業に反映させる配慮に欠けた点である。情報の提供に重点を置いた結果、履修者とのやりとりはリアクション・ペーパーとそれに対する回答にほぼ限られてしまった。履修者が70～80人という規模であれば授業中に履修者の質問を受ける、意見を発表する機会を設けるなども可能であった。2010年度はこのような反省点を活かしつつ、授業を行っていききたい。

もりだいら たかふみ
(本学兼任講師)